令和６年度　文部科学省委託事業「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」

全国青少年体験活動推進フォーラム　報告書

「体験活動には魅力がいっぱい！～誰一人取り残さず全ての青少年に体験活動を～」

事業の概要

【開催日時】**令和６年11月23日（土）9:45～15:15**

【会　　場】**国立妙高青少年自然の家**

【主　　催】独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立妙高青少年自然の家

【後　　援】新潟県教育委員会、妙高市教育委員会、上越市教育委員会、糸魚川市教育委員会
新潟県社会福祉協議会、妙高市社会福祉協議会、上越市社会福祉協議会、糸魚川市社会福祉協議会

【趣　　旨】家庭の経済状況に関わらず子供の頃に体験活動などの機会が多いと、その後の成長に良い影響が見られることが明らかになっている。しかし、社会状況の変化、コロナ禍、学校教育活動の精選等が影響し、体験活動が減少していることは否めない。
本フォーラムでは、特に体験活動等に馴染みのない青少年やその保護者に体験活動への興味・関心をもってもらうため、また体験活動の指導者、青少年教育団体・教育施設等に体験活動を推進してもらうために普及啓発を行い、誰一人取り残さず全ての青少年に体験活動が行き届くようにする。

【対　　象】幼児～小学校低学年児童、保護者、学校・教育施設・団体の指導者、幼保こども園の指導者、ボランティア、企業　等

【参 加 者】86名

【企画委員会】委員長　平野 吉直 氏〔信州大学特任教授〕
委　員　伊野　亘 氏〔上越市立高田西小学校介護員、元国立青少年教育振興機構理事〕
瀧　直也 氏〔信州大学准教授〕
中野　充 氏〔新潟青陵大学准教授〕
小菅 江美 氏〔森のこども園てくてく園長〕
水澤　哲　〔国立妙高青少年自然の家所長〕

日程と内容

10:15～10:25　**開会式**　開会のあいさつ（国立妙高青少年自然の家所長）

10:30～12:00　**基調講演・体験活動「夢につながる子供の頃の体験活動」**
プレゼンター：ミツル＆りょうた 氏　〔「体験の風をおこそう」運動応援団キャラバン隊〕

13:00～14:45　**セミナー＆ワークショップ**
① 幼児の森あそび部会「アソビがマナビ！森が育ててくれる」
コーディネーター：森のこども園てくてく園長　小菅 江美 氏
② 環境学習部会「山と森は環境学習の宝庫！国立７施設の取組紹介」
コーディネーター：特定非営利活動法人やまぼうし自然学校代表理事
加々美 貴代 氏
③ ICTと体験活動部会「体験活動 2.0！ 新しい自然体験のカタチ」
コーディネーター：新潟青陵大学准教授　中野　充 氏

14:45～15:15　**閉会式**
① セミナー＆ワークショップまとめ
② 全体のまとめ：信州大学特任教授　平野 吉直 氏
③ 閉会の言葉：上越市立高田西小学校介護員　伊野　亘 氏

独立行政法人国立青少年教育振興機構　国立妙高青少年自然の家

セミナー＆ワークショップ

①幼児の森あそび部会

○「アソビがマナビ！森が育ててくれる」をテーマに、幼児教育における自然体験について考えるため、幼児を含む参加者とともに火起こしや焼き芋づくりを実際に体験した。

○はじめから必要なものや方法など教えるのではなく、「食べ物」や「赤ちゃん」など、子供たちが分かりやすい、イメージしやすい言葉を用いることで、子供のやってみたいという思いを引き出していた。また、自分で割った薪を大事そうに最後まで持っている子供の姿から体験の大切さがうかがえた。

○現代は、ICT機器を使いネットで調べればすぐ分かる、すぐ教えてくれる、そんな時代である。しかし、「包丁で切る」や「火をつける」といった「ドキドキする！」という子供たちの実感を伴った知識がこれからの時代で必要である。

○子供に備わっている自ら高まろう、成長しよう、生きるぞ、という力を発揮する場面として、体験の機会は大切である。

②環境学習部会

○「山や森をフィールドとした環境学習プログラムの在り方」について、民間施設や国立施設の事例を基に参加者とともに考えた。

○「参加者の思いを叶える自然体験」を提供するために、「自然体験の入口」がとても重要となる。子供のころから「そうか！なるほど！もっと知りたい！」といった「センス・オブ・ワンダー」を養うことができる環境が必要である。

○森林環境教育では、「自分の責任で行動できるひとづくり」が目標となる。自然があるその地域を愛し、多数の人とのコミュニケーションを通して、自ら考え、行動できる、「人財」育成が必要となる。

○「豊かなフィールド」「実体験・五感を伴ったアクティビティ」「指導者の存在」。この３つが揃うことにより、より質の高い自然体験学習となる。

③ICTと体験活動部会

○これからの体験活動の可能性を広げる「リアルとバーチャルの融合」をテーマに、ICTの現状を学び、それをリアルな体験活動にどのように活かせるかを議論した。

○本を読んだり、人に聞いたりして調べることが、ICT機器を使うと数秒でできてしまう。そのような時代になっていく中で「ただ調べただけで終わり」になってしまわないように、指導者側がどんな問いや課題を子供たちに課すのか、その課し方が重要になってくる。

○主体的にICTを活用して情報収集することはこれからの時代とても重要なことだと思うが、まず目指すべき「ゴール」を設定し、それに向けてICT機器を活用して情報を得るという道筋が必要である。その設定がないとただやみくもに情報に埋もれることになってしまう。

○原体験があって、五感を研ぎ澄ます体験があることが主体的なICT活用の原点になってくる。

コーディネーター：小菅　江美　氏

体験活動をお土産に

初めて何かを作った体験、初めて火を起こした体験などは、それ自体が参加者にとっての「お土産」になる。子供たちの初めての体験活動では、怪我などの不安はつきものだが、大人たちが見守りながらやらせてみることで、子供たちの中にある力を引き出すことができる。そのことを大人に感じてほしい。

実感が伴った体験活動は、これからの時代を生きる子供たちにとって大切なものである。一人でも多くの子供たちに届くようにしていきたい。

コーディネーター：加々美　貴代　氏

環境学習を取り入れた体験活動

地域の特色ある自然環境を活かして環境学習を実施するためには、子供の五感や感性を刺激するプログラムと、それらを熟知した指導者の存在が欠かせない。民間施設・国立施設では、指導者、利用者、施設同士が連携し、つながり合って活動が展開されている。

これらの連携・つながりを大切にし、子供の感性を育み、将来につながる体験活動を展開する各地域・施設における取組が、さらに全国に広がっていくようにしていきたい。

コーディネーター：中野　充　氏

リアルとデジタルの融合

妙高自然の家で実施した事業での事例を基に、リアルとデジタル、ハイテクとローテクを融合させた体験活動の在り方について意見を交換した。

情報機器の発達により、ツールが豊かになっていく中で、体験活動は「いかに意味のあるものへとアップデートしていくか」が重要になっている。生成AIを活用しながら六感を働かせるアクティビティなど、テクノロジーと本物の体験活動を融合させ、人間ならではの厚みのある体験活動をつくり出していきたい。

閉会式

全体のまとめ　企画委員長　平野 吉直 氏〔信州大学特任教授〕

○基調講演・体験活動では、大人から子供まで楽しめる体験活動の在り方を示していただいた。子供たちに体験活動を届ける者として、「指導者自身が楽しむこと」の大切さを再確認した。

○コロナ禍を経て、未来に向かって体験活動を推進していくための道筋について、セミナー＆ワークショップでは幼児教育、環境学習、ICTの活用という３つの視点から活発に意見が交換された。子供たちに体験活動を提供していく青少年教育指導者として、体験活動の大切さや、いかにして感性を育むかについて、これからも一緒に考えていきたい。

フォーラム当日の様子を妙高ミミチャンネルで公開中です。ぜひご覧ください！

発行　令和７年２月
独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立妙高青少年自然の家
〒949-2235　新潟県妙高市大字関山6323-2
TEL 0255-82-4321　FAX 0255-82-4325

基調講演＆体験会

「夢につながる子供の頃の体験活動」

【プレゼンター】 ミツル＆りょうた 氏　「体験の風をおこそう」運動応援団キャラバン隊

ミツル＆りょうた氏

今回のフォーラムは、「誰一人取り残さず全ての青少年に体験活動を」のテーマを掲げ、青少年教育指導者だけでなく、幼児から小学校低学年を含む家族にまで対象者を広げて開催しました。第１部基調講演・体験活動では、「ミツル＆りょうた」の両氏からプレゼンターを務めていただき、歌やダンスを交え、参加した子供たちにとっては体験活動の楽しさを、青少年教育指導者にとっては体験活動から得られる学びを、それぞれが体験を通じて実感を伴った気付きを得る機会を提供していただきました。

おふたりは、それぞれ保育園で保育士として勤務経験があるだけでなく、自身が子供の頃から野外活動に親しみ、高校生の頃にジュニアリーダーとして野外活動に関わるなど、各方面で活躍してこられました。2005年に「ミツル＆りょうた」を結成してから、保育園や幼稚園のコンサートなどで、親子で楽しめる歌あり体操ありのステージを全国各地で繰り広げ、「昆虫太極拳」などのオリジナルの遊び歌や体操は、全国の保育園や幼稚園で人気を博しています。保育雑誌などに遊び歌や体操の執筆を行うなど幅広く活動されており、2019年から国立青少年教育振興機構の「体験の風をおこそう」運動の応援団キャラバン隊に就任し、その縁があって今回のプレゼンターをお引き受けいただきました。

第１部は、会場に集まった参加者の心と体を温めるため、おふたりの代表作「昆虫太極拳」から始まりました。だんだんと早くなる歌に合わせて、ランダムに出される昆虫の名前を聞き分けて指定のポーズをとるというダンス遊びでした。一つ一つの動きはとても簡単ですが、スピードがあがるにつれて難しくなり、子供から大人まで夢中になってポーズをとりました。たくさん動いて体が温まるだけでなく、会場の雰囲気も温まっていました。

続いて、おふたりが歌う「あたらしいあさ」に合わせ、子供から大人までの参加者の全員で、何度も「おはよう！」、「おはよう！」と歌声を交歓しました。声と笑顔がだんだんと大きくなり、自然と手拍子が起こり、参加者の一体感が高まりました。「しりとり動物園」（写真右）は、箱から引き出されるカードに描かれた動物が少しずつ見えてくる間に、名前を当てるしりとり遊びでした。名前の頭文字と少しだけ見えるイラストのヒントで、参加の子供たちが次々と動物名を当てていきました。最後のお題は、ライオンらしきイラストが見えますが、ミツルさんは、「『ラ』ではじまって『ン』で終わるけど、ライオンではない動物」とヒントを出しました。すっかりライオンだと考え、簡単だと思っていた一同は、驚きを隠せません。一層興味を引き付けられました。しりとりの答えは「ライオンタマリン」というサルの仲間でした。子供も大人もおふたりが仕掛けた急展開の流れにすっかり魅了されました。

この後も、歌やダンス、手遊び、ドングリマラカス作り、作ったマラカスを使ったリズム遊びなど、たくさんのプログラムを両氏と会場が一体となって行いました。90分間の熱いステージがあっという間に過ぎたように感じられました。

歌やダンスの合間に両氏が語ること、一つ一つのプログラムから伝わってくることの一番は、「遊びは楽しくなくっちゃ」というメッセージでした。両氏は、楽しいからこそ「もっとやってみたい」、「新しいことにも挑戦してみたい」という思いが高まり、主体的な行動（工夫や改善）を促すことを、歌やダンス、リズム遊びを通じて伝えてくださいました。また、「安全であること」も大切です。ケガや事故がないように環境や道具の安全を確認するだけでなく、誰もが安心して取り組むことができる心理的安全性も大事にされていました。遊び歌などでは、ゆっくりと簡単な動きから早くて複雑な動きへ、自分一人でできることから複数人の活動へ等、同じことを繰り返しながら徐々にレベルアップさせていく工夫がありました。「誰一人取り残さない」心理的安全性が担保された体験活動でした。ドングリマラカスを作ってリズム遊びをする時、両氏の歌や話が始まってもマラカス作りをやめずに作り続ける子供や、歌っている最中にステージに腰かけてマラカスを振ってみたりする子供の姿がありました。ミツルさんもりょうたさんも、特段の注意を促すこともなく、「夢中になっていますね」等と軽く触れながらも楽しく歌やダンスを進行していました。ステージ終了後にうかがうと、「特に幼児は、その子の背景まで分かってないとどのように話して聞かせたらよいか分からないですよね。そもそも、あの子たちは楽しんでいただけだったし、危険なことは無かったので、何も問題はなかったですよ。」と笑って答えられました。私たちが青少年教育指導者として子供と対した時、自身が予定したプログラムの進行にとらわれ過ぎず、目の前の子供の様子を確認しながらリスクとタイムをマネジメントしゆとりある態度で接すること、子供の分かり方やその背景まで想像して関わっていくことの大切さを再度確認することができました。

体験の格差や減少が課題とされる今こそ、両氏が言う「遊び」を「体験」に換え、「体験は楽しくなくっちゃ」を合言葉に、まずは私たち多くの大人が体験活動を進んで楽しみたいと思います。そのことが、青少年に対して多様な体験活動の機会を創出し、多くの青少年のところに体験活動が届くのだと考えます。お話だけでなく、子供と共に活動し、実感を伴った理解が深まった第１部でした。

参加者の感想

- 歌やリズムに合わせて体を楽しく動かすことができ、良い汗をかきました。
- お二人の軽妙な中にも自然体験の大切さに触れたトークも勉強になりました！
- 童心に返って楽しませていただきました。
- 例年にはあまりない、LIVEありの基調講演で、入りやすく堅くなかったです。
- すばらしい体験でした。職場（小学校）でも活用させていただきます。